

平成26年度 南アルプス市立大明小学校関係者評価書

第1回 学校関係者評価委員会

- 1 実施日 平成26年8月28日(木) 午後7時30分～午後9時00分
- 2 会場 大明小学校校長室
- 3 参加者 学校関係者評価委員
石田敏枝 市川和男 塩澤 潤 (委員長)
杉山由貴子 村松則子 望月孝一 (敬称略・順不同)
学校職員
依田良文 (校長) 石川哲也 (教頭)
山本啓子 (教務主任)

4 学校から提案された内容

- ① 学校経営について (校長)
- ② 学校の自己評価について説明
 - 教職員による自己評価 (教頭)
 - 児童アンケート (教務主任)
 - 保護者アンケート (教頭)

5 協議されたおもな内容

- ◎ 教職員による評価、児童アンケート、保護者アンケート結果についての考察

6 協議の場でも出された意見

- 保護者のアンケート結果が気になっていたが、否定的な評価が減ってきてよかったと思う。昨年度のPTA執行部もあいさつ運動を心がけて活動をしていた。登校時には、保護者や地域の方もあいさつをしてくださっている。地域の大人の姿を児童が学んでいけるとよいと思う。
- 声かけは挨拶から始まると思う。私の家の主人も12年間にわたって朝・夕登下校時に立って交通指導やあいさつを交わしているが、児童に対して一番効果があったのは「皆さんの、ありがとうという一言が一番うれしいよ。」という言葉だったと言っていた。次の日から、「ありがとう」、「おはよう」などのあいさつが自然と言えるようになっていった。先日、自分が畑仕事をしていると中学生が「こんにちは」とあいさつしてくれた。大人が気持ちの良いあいさつをして見せることが一番大切なのだと思う。
- 学校支援ボランティアで「読み聞かせ」をしている人たちは、月に一度図書館で学習会をしている。学校応援団として、機会を与えてもらい積極的に参加したいという気持ちが地域の人たちにはあると思う。だから、学校応援団という組織的な活動は地域・学校が互恵的關係でありとても良いと思う。
- 学校は、教育活動のほかにいろいろな調査や報告書の作成などを要求されていて、とても忙しく大変だと思う。
- 秋田県では考える力をつけているという。沖縄も秋田県に学び、考える力をつけるようにしている。やはり、考える力を身につけるということは、これからの社会で生き抜くためには必要なことではないかと思う。

- 「大明小だより」はとても良いことが書いてあると思う。地域で回ると話題になる。
- 児童のアンケートで「学校へ行きたくない」という理由に、「だるいから」、「面倒くさいから」などの理由が出されている。昔は学校へは行くものだと思っていた。子どもたちは遊びたいことを「だるい」と表現しているのではないか。これらは基本的な生活習慣とも関連があり、現代的な生活習慣とも関連があるのではないか。生活のリズムがきちんとできているのであれば、「だるい」という表現は使わないのではないか。
- 共働きの家庭も普通になり、夕飯が遅いという家庭が増えている。
- 携帯電話（スマホ）ゲームの普及率が増えている現状である。昔は一人であることを「一人ぼっち」と表現したが、いまは数人が一緒にいる部屋にいてもそれぞれがゲームに夢中になり、コミュニケーションがない。いまは、複数人で一緒にいてもそれぞれが一人ぼっちである「みんなぼっち」の現状ではないか。
- 今は、仲間で汗をかいて遊ぶ場も、時間もなくなっている。子どもの遊び戯れる声がない。
- スマホの「LINE」については小学生ではあまり話を聞かないが、中学生では部活の連絡などでも使っている。確かに便利ではあるが、気持ちを直接声に出して表現することができないので、子どもたちも段々自分の気持ちを口に出して表現することが苦手になっているのではないか。
- 携帯やスマホなどでのいじめや仲間外しなど、新たな形のいじめが問題になっている。県や学校などで携帯やスマホの使い方のルールや時間等を決めているところもあると聞く。一人だけだと仲間外れになる心配があるが、全校でやると安心できる。そのようなルール作りも必要ではないか。
- 保護者一斉メールは便利ではあるが、実際の災害等では期待されるような機能を発揮できるかどうかは心配である。一斉メールに頼らず、学校との日常的な確認事項をしっかりと共通理解し、実際の災害時に適切な行動ができるようにしておくことが大切であると思う。